



漢詩を味わう

第99回

かさねてりひょうじにわかる
重別李評事

王昌齡

莫道秋江離別難

道う莫かれ 秋江 離別難しと

舟船明日是長安

舟船 明日 是れ長安

吳姫緩舞留君醉

吳姫緩舞して君を留めて酔わしむ

随意青楓白露寒

随意なり 青楓白露の寒

秋の川辺での別れはつらいなどと言わないでほしい。
君が乗る船は、明日になれば長安に着いているのさ。
吳の舞姫のゆったりとした踊りで君をひきとめ、別離の酒に酔わせよう。
まだ青い楓の葉に白露が降りる初秋の寒気などどうでもいいことだ。

《吳姫》吳の地方の舞姫。吳には繁華な都会が多く美女も多かった。

《緩舞》ゆっくりと舞うこと。

《随意》勝手にさせる。ほうっておくこと。

《白露》秋のはじめに降りる露。礼記の「孟秋の月、涼風至り白露降る」に基づき、

二十四節気の一つに数えられるようになった。陽暦の九月七日頃。

王昌齡は京兆（陝西省西安市）の人。二十九歳で進士に及第し官位に就きましたが、奔放な性格が禍して左遷と中央復帰を繰り返しました。安祿山の乱のとき郷里へ帰りましたが、刺史の閻丘暁に憎まれて殺されました。江寧（江蘇省南京市）の役人だったことから王江寧とも呼ばれます。七言絶句の名手として李白と並び称されました。詩の題名にある李評事という人物については不詳ですが、評事は官名で刑事関係をつかさどる職務です。この李という人物が長安に行くことになり、江寧の役人だった王昌齡が送別の席で作った詩です。「重ねて」とあることから、一度送別の宴をしたのちにいよいよ出発にあたってまた別れの酒を酌み交わしたようです。現代でも船での別れというものは、列車や飛行機での送別と違って、ゆっくりと徐々に遠ざかっていくために離別の情を強く抱かせます。感傷的な秋ともなれば猶更です。承句（第二句）の「明日是れ長安」は、江寧から長安は一日で行ける距離ではありませんが、旅立つ人の気をひきたてようと敢えて誇張しています。今は後ろ髪を引かれるようでも、明日になれば心は長安へと向き、船内も長安になったようなものだという意味にもとれます。転句（第三句）では宴席の風景に戻ります。吳の地方には美人が多いといわれ、今でも芸妓に故郷を問えば蘇州と答えるといえます。その吳の舞姫に酒興を添えて友を引き留めさせようという訳です。そして結句で白露の寒さなど放っておいて、しばしの歡を尽くそうと結びます。王昌齡は七言絶句という短い詩形のなかで、秋口の船着き場での情景に惜別の心を交え、そして華やかな吳の風俗を加え、それに季節感までの確に盛り込むことを怠りません。この詩のような離別詩や辺塞詩などに感情の籠った名作が多く「詩家の夫子（大先生）王江寧」と称されました。

参考文献・唐詩選（岩波文庫）・漢詩体系系第七卷唐詩選下（集英社）・漢詩の事典（大修館書店）

落葉秋山に満ち 征人久しく還らず 一声何れの処の雁ぞ 応に玉門関に向かう

落葉満秋山 征人久し 不還一聲
何處 雁應 向玉門関

《大意》山に落ち葉の積もる秋の季節となったが、旅人は故郷に帰ることも出来ず長旅を続けている。ふと頭上を見上げると、はるか空のかなたを雁が鳴きながら玉門関に向かって飛んでゆく。(呉襄詩・秋吟)

天道には遷易有り 人理には常全無し

天道有遷易
人理無常全

象東書

《大意》天道には遷り易わりというものがある。人間の道には何時も安全であるということはない。(樂府「塘上行」)

天道有遷易
人理無常全

象東書

読み 清秋 竹露深し (清く澄んだ秋にしたたる竹の露は深い・曹学佳)

清秋
竹露
深し

佐藤象雲書

雨冠は内部を一点に作り扁平に。
「露」は緊密に。

傍は横画の分間を整えて上下の中心を通す。

「禾」に「火」が寄り添う形。
旁二点の位置と方向に注意。

概形は円。傍の上下のバランスに留意する。

左右同形の場合は、旁をやや大きく。
上方に高く。



一般部規定課題出品について
規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

露深 清秋竹

露深 清秋竹

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

次号課題

隸書

思長 孤燈客

露深 清秋竹

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支 部		順 位		氏 名	
<p>心なき身にもあはれは知らぬけり</p>					
<p>鴨立つ沢の秋の夕ぐれ</p>					

音

ソ
ン
イ
カ
ン
ト
ウ
ギ
ョ
ジ
エ
キ
エ
イ

略解

召公が甘棠の木の下で政をしたので万民はその徳をたたえ、棠の枝葉も切らないようにした。死後も益々その功績をたたえた。

存以甘棠去而益詠
存以甘棠去而益詠
存以甘棠去而益詠

佐藤象雲書

西行法師

和泉溪石先生書

微言廣被

微言広く被り……

廣微
被言

褚遂良・雁塔聖教序

（初唐・西暦六五三年）の臨書（38）

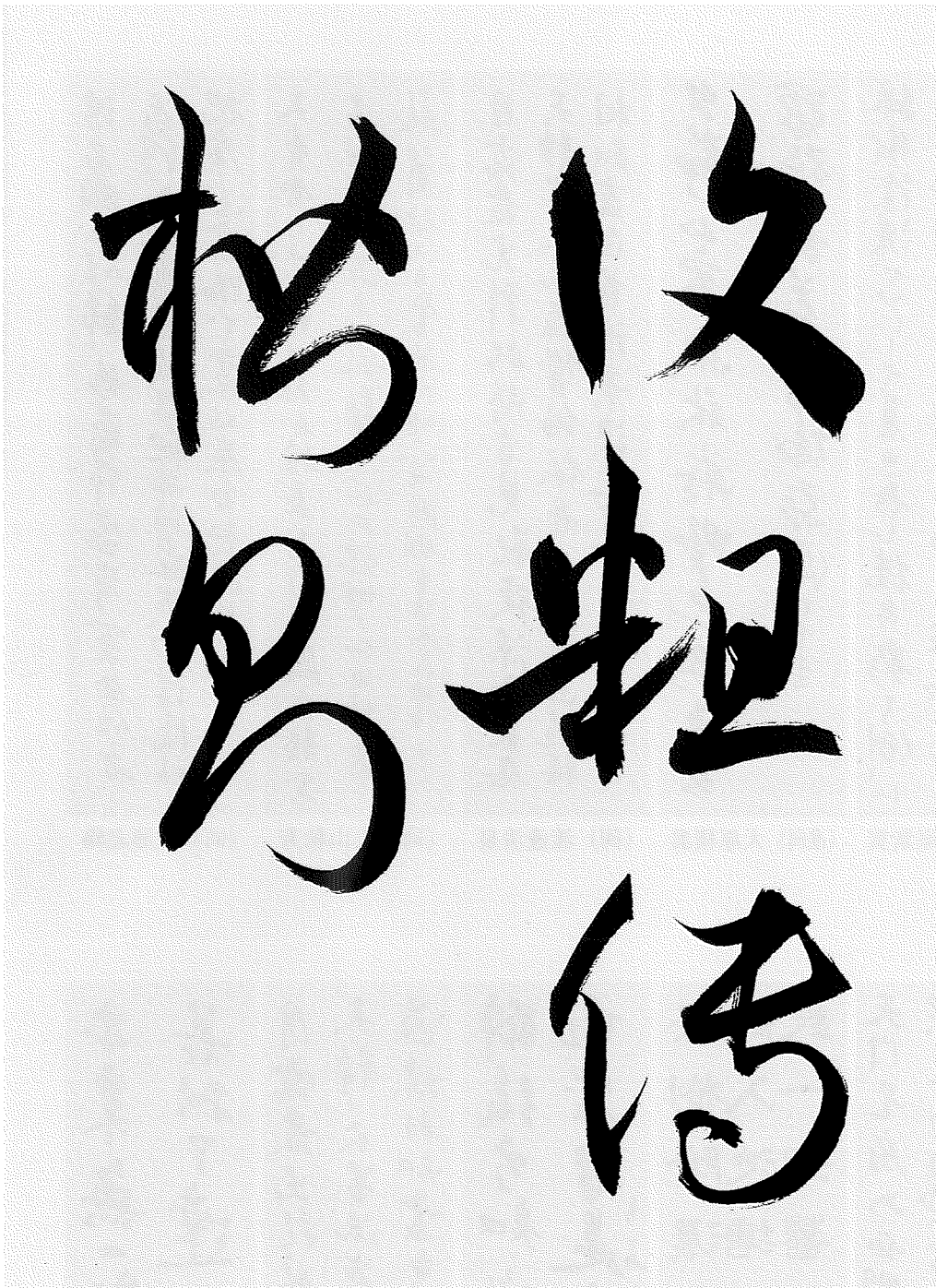
象雲臨

『微言廣被』

雁塔聖教序は今回の秋季昇格試験の臨書課題ともなっていますが、会員の皆さんの臨書を添削して思うことは、原帖に忠実であるようにと細い線で書くと非常に弱く感じることで、それは雁塔聖教序の線は細くとも健勁で粘りがあるためです。何の臨書でもそうですが、形は捉えられても線質を把握することは至難の業であるということを痛感し、形を偏重する臨書法を反省させられます。また線を捉えることこそが臨書学習の大きな意義だと思えます。ただ一言で線質といってもすぐ再現できないと思いますので、まず起筆や線の太細の変化に留意し、筆圧と緩急のリズムを大切に運筆することから始める必要があります。

復粗傳楷

復た粗ほ楷則を伝うと(雖も)



象雲臨

■孫過庭・書譜(初唐・西曆六八七年)の臨書(20)

「復粗傳楷則」

今月の課題の文言は孫過庭が二王(王羲之・王献之)の書の優劣について考察している部分です。王献之の書は王羲之の書を受け継ぎ大体の書法の楷則(規矩)は伝えていても、本当にはまだ跡を継ぎえていないのではなからうか。と疑問を投げかけています。つづけて王献之が自らの書法の由来を神仙におき、父の書法をお手本として崇ぶことを恥じるということは論外である。と断じています。これは王献之の書法が飛鳥や仙人から授かったとする仮託神仙という説を基にしています。以前にも述べましたが書譜は長幼の序を重んじる儒教思想に基づいた書論です。

さて今月の五文字を書法的に観察すると、「復・粗」は筆の腹を利用して面的で直線が主体ですが、つづく「傳・楷・則」は直筆で筆先を利かせた繊細な線へと変化していきます。